

高校生課題研究ハンドブック Chapter 1

リサーチ、プレゼン、レポートの枠組み

1-1. 何のために“レポート”を書くのか、考えましょう

それでは、高校生の皆さんのためへの、リサーチ、プレゼンテーション（プレゼン）、レポート作成のための実践編を始めましょう。まず、理解していただきたいのは、何のために、“リサーチ”をしたり、“レポート”を提出しなければいけないのか、その理由です。

とくに、これから大学をめざして勉強しなければならない高校生の方々にとっては、リサーチやレポートについてなかなかイメージがわきにくいかもしれません。ひょっとしたら、「こと細かに調べなくても、あるいは小難しく書かなくても、言いたいことは伝わる」等とお考えかもしれません。しかし、リサーチやレポートでは好き勝手に調べたり、書いたりして良いわけはありません。それは、実は高校や大学を卒業した後、企業や各種機関・団体等で仕事に就いた時に必要なスキルなのです。

「日本の大学はどうして、レポートの書き方を教えないのですか？」

何年か前のことですが、大学院に客員教員として招かれていたある大企業出身の方から、真剣な顔で「日本の大学はどうして、レポートの書き方を教えないのですか？」と質問をいただいたことがあります。

かつて、高度成長期からバブルの時代にかけて、日本の大学は“レジャーランド”とも諷されている時代がありました。卒業生を採用する企業の方にも、卒業生は特定の学問の色に染まるよりも、むしろ“白紙”の方がよい。そして、就職したら、仕事の中で教えること（＝いわゆるOJT；On the Job Training¹）で充分だ、という雰囲気さえなかったわけではありません。しかし、もちろん、現在はそんなことはありません。現在の企業等は、大学を卒業された方にはその学歴に見合うきちんとした能力を要求します。その一つが（リサーチの進め方も含めた）レポートの書き方なのです。

さて、先ほどの客員教授の方からのご質問に対しては、「いや、今の大学はそんなことはありません。例えば、1年生を対象とした基礎演習という授業では、リサーチ・スキルや、その結果をプレゼンテーションしたり、レポートにまとめる方法を、テキストを使って伝授しています」とお答えしました（関西学院大学総合政策学部、2012）。その成果がこのハンドブックにも活かされています。

いずれにしても、高校生の皆さんにはしっかり覚えてください。**会社や各種機関・団体は、レポートの書き方が身につけていない方を必要としないかもしれません。**つまり、リサーチをおこない、その結果をレポートにまとめることは、皆さんの将来にとって大事な修業と言えるのです。

レポートとはたんなる作文・感想文ではありません

もうすでにお気づきかと思いますが、このシリーズで“レポートの書き方”を言及する時には、それは作文・感想文の作成ではありません。とくに高校・大学を卒業した後に就く“仕事”において、テーマ設定 ⇒ リサーチ ⇒ 分析⇒考察 ⇒ プレゼン・レポート・ディスカッションという流れは職業人として身に付けて当然のことです。つまり、大学卒業後のキャリアにこそ、レポートは重要です。それをしっかり学ぶことこそ、今のあなた

¹ OJTとは、就職後、職場で実務にたずさわりながら、必要な知識や技術、技能および態度等を指導、修得させる企業内教育を指します。

方の目標です。それは、以下のようなスキルを身に付けることにほかなりません。

- (1) グローバル・スタンダードの“**リサーチ**”のスキルを身に付ける。
- (2) グローバル・スタンダードの“**プレゼンテーション（以下、プレゼン）・レポート**”のスキルを身に付ける。
- (3) 同時に、企業に就職したら必要な“**チームワーク**”と“**ディスカッション**”のスキルを身に付ける。

(3)は少し説明が必要かもしれません。大学でも企業でも、独りだけでリサーチすることはめったにありません。たいていグループ（チーム）を組みます。チームを組むことの良さは、まず複数の“目線”で物事を見ることができることです。でも、その複数の目線を活かすにはチームワークを組み、互いにディスカッションする能力が必要です。それもまた、高校・大学での学びの重要な要素です。

プレゼン・レポートはコミュニケーションです

次に、「プレゼンもレポートも、**コミュニケーション**である」という点を理解して下さい。相手に理解してもらえないと、プレゼン・レポートは意味がないのです。

その相手とは誰でしょう。ここでプレゼンやレポートの対象＝**聴き手・読者**を意識して下さい。大学では、（とくにレポートは）**教員**だったり、周囲の**学友**だったりします。会社では、**上役**や**同僚**、あるいは**顧客（クライアント）**です。その人たちに理解してもらうための工夫が必要なのです。そのためにも、原稿やパワーポイント等の資料は、書き手からの目線だけでなく、聴き手からの目線も意識する必要があります。企業にとって、そうした**コミュニケーション・スキル**を持った方こそ採用したいと思うでしょう。

それでは続いて、レポートの前提としてリサーチの心構えを説明しましょう。

1-2. リサーチとは何か？

リサーチの心構えとしての3つの条件

プレゼン・レポートのベースである“リサーチ”の心構えに3つの条件をあげましょう。

- (1)（例えば、高校・大学では）**学術的**、あるいは（会社では）**社会的貢献**：リサーチのテーマは「ほかの人と違うこと＝自分のオリジナル」が望ましいとされています。それが結果的に**新しい情報**を産み出し、学術にも社会にも貢献になれば素晴らしいことです。もちろん、失敗するかもしれません。しかし、**ノーベル賞**等ではしばしば指摘されていますが、**失敗から思わぬ成功が生まれることも珍しくありません**。そもそも「試してみなければ」進歩はありません。ですから**失敗を恐れず、オリジナルで、思わぬ貢献**に結びつくかもしれない**新しいテーマ**にチャレンジして下さい。
- (2) **客観性**の保証：その一方で、リサーチでは事実を積み重ねることで議論を展開しなくてはなりません。聴き手・読み手（高校・大学では先生やほかの同級生、会社では上司、同僚、そして顧客）に理解していただくためには、自分の主観だけで書きまくってもいけないのです。それでは、どうすれば“客観的”と評価されるのでしょうか。大きく分けて、以下の4つの方法があります。
 - ① **数値**（数字）を用いる。もちろん、数字は作り方や見せ方で聞き手や読者に与える印象が異なりますが、それでも数字が持つ客観性は有効です。
 - ② 先行研究を**引用**する。人間は万能ではありません。自分の知らない領域のことは素直に、すでに研究をおこなった専門家の意見（**文献・資料**）を参考にすべきです。一方で、無断で他者の文章を引用すれば盗作になります。

③**歴史的事実等と照合**する。

④アンケートや取材（インタビュー／ヒアリング）、フィールドワークで**自らリサーチ**する。

このような“客観性”とは、19世紀にイギリス王立協会²で「科学とは何か？」を議論する上で中心となった概念です。すなわち、**客観性の維持＝科学**なのです。

- (3) **公共性**の保証：レポートを書く際、不特定多数の人が読む可能性を自覚して下さい。したがって、日記やエッセイのように主観的感想ばかりを述べてはいけません。できるだけテーマに対する回答に焦点をあてた文章になるように工夫して下さい。テーマも、より汎用性・一般性が高い課題が望まれます。1例をあげれば、「関西地区の大学生の英語力」よりも、「日本人の英語力」の方が公共性の高いテーマとみなされます。その一方で、テーマをあまりに広げすぎると分析や議論が拡散して、レポートとしてのまとまりに欠けることになりかねません。（Chapter 3で触れるように）とくに初心者にはある程度「テーマを絞り込んだ」方がレポートとしてはまとまりやすくなります。そのあたりは先生方からご指導を受けながらゆっくりと身につけましょう。ところで、“公共性”に関連して、もう一点付け加えたいと思います。現代ではインターネットも一つの“公共”です。誰もが簡単にウェブで論文や著作をアクセスできますが、それを黙ってコピーすることは（＝コピー）、公共性を裏切る犯罪＝剽窃行為です。きちんと引用の手続きをとるように心がけましょう（Chapter 7-4を参照）。

リサーチ・レポートの種類とレベル

続いて、リサーチやレポートはどんな種類に分けられるか、リサーチの進展にそって説明しましょう。なお、この順番に研究としてのレベルが上がっていくものと思って下さい。

レベル1（**論点整理型**）：これまでのリサーチの流れを整理しながら、現在の議論をグループ分けします。この作業は発表準備等に必須で、リサーチの第一歩と言えます。

レベル2（**サーベイ型**）：レベル1での議論を整理して「何が未解決の問題なのか？」を探します（サーベイ）。実はこれだけでなかなか大変です。未解決な問題を3、4つ提示するだけで十分な学術的・社会的貢献です。

レベル3（**現場分析型**）：レベル2のサーベイで浮かび上がった対立する議論の是非を、何らかの基準で比較検討します。自然科学では仮説検証型の論文にあたりますが、経済学等でも証明に統計手法が用いられます。政治学や国際関係論では、歴史的事実と照合して議論することが多いようです。

レベル4（**政策・企画提言型**）：この最後のレベルでは、分析結果を具体的な提案に落とし込みます。単純に「～すべきである」だけではだめです。実行体制や実施にあたって予想される問題点等も含め、新提案を目指します。

レベル1からリサーチを進め、レベル3か4にたどり着くべきですが、時間がなければ、レベル2で終わっても仕方ありません。また、レベル1は、そうした道筋の足がかりと考えて下さい。

1-3. リサーチ・プレゼンテーション・レポートの構造・形式

さて、リサーチに基づいたレポート／プレゼンテーションは基本的に3つの部分からな

² 英名は“Royal Society”で、1660年に英国王からの勅許を得てから現在も続く、イギリスでもっとも古い学会です。

ります。以下に概略を説明しますが、これは学術論文の形式として標準的なIMRAD (Introduction, Methods, Results and Discussion) の簡易版と思って下さい。

- (1) **序・はじめに** (Introduction)：このパートは「**テーマ**」の説明です。何より肝心なのは、貴方がテーマに感じた魅力や重要性を他者に伝えることです。具体的には、
 - ①テーマの社会的位置づけ：未解決の課題を示し、研究の必要性を説明します。
 - ②目的：このレポート（リサーチ）で何を明らかにするのか、明記します。
 - ③仮説：そのテーマについて自分なりの仮説を提示します。
- (2) **調査結果** (Results)：リサーチで調べた結果を記述します。ここでは客観性を心がけて下さい。文献は必ず引用を、データを利用した場合は出典を明記するよう注意して下さい。IMRAD型のレポートでは、Resultsの前に方法や対象を説明するMethodsやSubjects等が入ります。
- (3) **考察・議論** (Discussion)：調査結果を自らの視点で解釈、考察、そして提案します。プレゼンテーションでもレポートでも、このパートこそ一番大切です。グローバル・スタンダードでは、考察・議論がオリジナルで、新たな謎・課題が解き明かされ、さらに新しい仮説を打ち出すリサーチほど、立派な研究と評価されます。ある研究者はこう指摘しています。「**重要な発見をしようとするよりも、自分の発見を重要なものにするに、努力すべきである**」(白上、1972)。自らが発見した事実に、自分も他の人も想像さえしていなかった価値があることに気づき、「この発見はこんなに重要なんだ」とアピールする。これがリサーチの醍醐味です。
- (4) **引用文献・資料** (書籍名、著者名、出版年、出版社を明記)：レポートの文末には、参考にした文献に関する引用文献・資料をまとめた表をつけねばなりません。

最後に強調したいことですが、それは(1)序→(2)結果→(3)考察というレポート／プレゼンテーションの流れが、一貫した**ストーリー (筋書き)**として読者・聴き手がスムーズに受け取ることができるよう、工夫することです。それができてはじめて、読者・聴き手とのコミュニケーションが可能になります。

リサーチにおける先生方の役割

最後に、こうした課題研究における先生方の役割にも触れておきましょう。リサーチやプレゼンは基本的には生徒の皆さんの自主性に基づくものですが、その場合、先生方の立ち位置は“**インストラクター**” + “**産婆役**” かもしれません。インストラクターとは、リサーチの方法論の大枠を指導していくこと、そこからはずれそうな生徒さんを適切な道筋に戻れるように導くこと、そして産婆役とは古代ギリシャの哲学者ソクラテスの産婆術、「対話によって、相手の不確実な知識から真正な概念が生まれるのを助けること」(『広辞苑』第5版) にほかなりません。

それでは、次のChapter2では、リサーチからどのようにプレゼン、レポートに発展させていくかについて、説明していきたいと思えます。

1-4. 引用文献

関西学院大学総合政策学部編『基礎演習ハンドブック改訂新版 さあ、大学の学びをはじめよう!』関西学院大学出版会、2012。
白上謙一『生物学と方法』河出書房新社、1972。

2018年3月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部